

西郷隆盛

黒潮の巻

林房雄



西郷隆盛 第八卷

黒潮の巻

製函所	製本所	印刷所	発行日	発行者	発行所	定価	著者	書名
文京紙器株式会社	大口製本印刷株式会社	図書印刷株式会社	昭和三十九年十二月十五日 初刷	徳間康快	徳間書店 東京都港区芝新橋四の一〇	三八〇円	林房雄	西郷隆盛 黒潮の巻

乱丁、落丁ありましたらおとりかえいたします

林房雄©

林房雄

# 西郷隆盛

第八卷 黒潮の巻



西  
鄉  
隆  
盛  
／  
目  
次

黒潮の巻 \* \* \* \* \* 目次

第一章 夜見がえり \* \* \* \* \* 9

第二章 八手蜘蛛 \* \* \* \* \* 29

第三章 敗軍の兵 \* \* \* \* \* 41

第四章 別れ路 \* \* \* \* \* 55

第五章 潮がかり \* \* \* \* \* 69

第六章 榕樹の島 \* \* \* \* \* 89

第七章 民謡 \* \* \* \* \* 100

第八章 新居 \* \* \* \* \* 124

第九章 島の秋 \* \* \* \* \* 147

第十章 切矢の祝 \* \* \* \* \* 159

第十一章 紅花雪 \* \* \* \* \* 170

第十二章 重富屋敷 \* \* \* \* \* 182

年表 \* \* \* \* \* 204

挿絵・山崎百々雄／装幀・上口睦人



黒  
潮  
の  
巻



## 第一章 夜見よみがえり

帆綱を切られた舟がようやく逆行しはじめた時には、坂口吉兵衛の投げ入れた舟板はもう二、三町も波に流されていた。

折りあしく月は落ちつくし、山の端の夜明けの色はまだかすかだった。波間に黒い点になって浮いている舟板をたよりに潮流の方向を察しながら、船はいくどともなく大崎の鼻あたりを漕ぎめぐった。一刻が永劫えいじょうのように長かった。平野国臣にとっても、坂口吉兵衛にとっても。

国臣は舟べりにしがみついたまま、ぶるぶるとふるえていた。何事ぞ、敬し愛し信ずる先達せんたつは、われにも告げず、二人ながら南海の寒流に身を投じたのである。あざむかれたとは思わぬ。だが、あざむかれなかったとも思いきれぬ。一筋の道に命をかけた二人であることはよく知っている。だが、同じ道に命をかけた今一人がこの自分であることをなぜ信じてくれなかったのか。ただ一言でいい。いのち死すべき理由を……いや、理由はいらぬ、死すべき覚悟を一言だけ、この自分にあかしてくれなかつたのか。聞いて後れをとる自分では決してなかつたはずだ。

「坂口さん、人間の身体は沈むものですか」

「沈みますすじや。水死人の身体は一たん海の底まで沈んで、二日か三日たたねば浮きあがらぬものじ

坂口吉兵衛の気持は、ただ「不覚」の一語につきた。生れて五十幾歳、役を奉じて三十年、まだ一度も罪人の護送に不覚をとったおぼえはない。縄抜けも自殺も一味徒党の奪還計画も未然に察して、未然に防ぐ勘の鋭さは、わが天与の能力と修練のたまものであると自信していた。それがあまりにも見事に裏切られた。かくも平然と、かくも悠々と、この上方坊主と薩摩男は、いかなる心術によって、わが目と耳をあざむき通し得たのか。二つの死骸が浮ばぬつもりなら、それもよし。この吉兵衛は、たとえ錦江湾の水底にもぐり入っても、わが懐の捕縄を、二つの水ぶくれの死骸にかけ渡してみせるぞ。

空しい捜査はもう小半時もつづいている。東雲しののめの茜の色が波を染めはじめた。ふなべりに取りついたらま重助はまだすすり泣きをやめぬ。はじめの間は、足を上げて蹴りつけたいとまでいらだたしかったその泣声なみごゑが、いつの間にか心に染み、身に伝わり、平野国臣も坂口吉兵衛も声をあげ、地団駄じだんたふんで泣き出したい思いであった。

\*

暁の光が風に乗って海の面にひろがって行く。海は夜の衣をぬぎ始めた。

平野国臣は焦点の定まらぬ目で紫紺から紺青こんじょうにかわる波の色を茫然と眺めていた。陽がのぼれば、南の潮は底の底まで澄みわたって、魚介海藻のたたずまいまで透けて見えるかもしれぬ。白珊瑚樹の森の蔭、わだつみの宮の奥つきに、静かに眠る二つの裸身が見える。……愚かな幻想げんそう。

すでに万事は絶望と思われた。船の進みものろい。漕ぐ船頭の腕の力も抜けた。かくも空しい時間がすぎ去っては、海の魚ならぬ二人の息は絶え果てたであろう。浮び上ったとしても、もう死骸である。

「もうあかん」

上方言葉が国臣の唇をもれた。野間原の関所で聞いた月照の言葉である。

「駄目じゃ」

舳先の方から坂口吉兵衛の声が応じた。「それほど速い潮の流れでもないのじゃが、浮いて来ないところを見ると、底の藻にでも巻かれたか」

「重助、泣くな。女々しすぎるぞ！」

国臣はどなりながら、自分もぼたぼたと波の上に涙を落した。

その涙が乾きかけた時、国臣は波の底に不思議なものを見た。暁の光が白い矢になって斜めに幾筋ともなく射し入っている真つ青な水の底に、白い光の点のようなものが浮び、それが船の動きと同じ方向に移動しながら、次第に大きくなり、次第に黒ずんで来る。流れ藻か、暗礁の影か。期待をかけずに瞳を遊ばせているうちに、不明瞭な黒点がだしぬけにぼつんとふくらんで、重さ合った人の形になった。

「おおッ！」

立上りざま、国臣は物に憑かれたかのような叫び声を上げた。「浮いた。浮き上ったぞ」

「浮いたかッ！」

坂口が叫びながら駆けつけて来る姿は見たが、それから後は夢中であつた。……われにかへつた時には、国臣は踊るような手つきで羽織をぬぎ、袴をぬいでいた。艫の間に横たえられた水浸しの二つの死体に乾いた着物を着せるためであつた。

水中から救い上げられたとき、月照は吉之助の背中に子供のように背負われ、両手は肩にかけ、両脚は固く吉之助の腰にからませていたと、後になって聞かされたが、国臣の記憶にはなかつた。

見ると、坂口吉兵衛も重助も半裸の姿であつた。ぬいだ着物はみな月照と吉之助に着せかけた。船頭も潮の匂いの強い刺子をぬいで差出した。

人の命を救おうとする心には身分も職掌もなかつた。惻隱そくいんの情と古えの賢者が言つたのはこの心か。船中の五人はすべてを忘れて、応急の手当と介抱に心を尽した。

\*

寒中の水に一時間以上も浸つた二人の身体は、息もなく、脈もなく、氷のように冷えきつていた。

あるだけの夜具を着せかけ、五体をおしもみ、水も吐かせたが、息を吹きかえす様子もなかつた。

焚火が欲しかつた。

坂口吉兵衛は岸边を見晴らし、程遠くない浜辺に四、五軒の人家の見える入江が華倉の湊であることを見きわめると、

「よし、あの浜に舟をつけるぞ」

と、船頭に命じた。

船底が岸辺の砂につくと同時に、坂口は部落の方にかけて出して行った。間もなく帰って来た時には、村の若者を三、四人引きつれていた。若者はそれぞれ雑木の枯れ枝と薪束まきたばをかついでいた。

盛んな焚火がはじまった。

焚火の両側に薪ひしろを敷き、二人の身体を横たえた。国臣と重助が月照の介抱につとめ、坂口が吉之助の手当を引きうけた。

村の人たちは、二人の旅客が何かの間違いで足をふみすべらし、海中に落ちたのだと思いこんでいた。坂口が当座の気転でそのように言いつくろつたのであるが、そう言われなくとも、吉之助の巨大な体格と月照の清潔な姿を見ては、これがお上のお尋ね者であり、自殺をはかった水死人であるとは想像できなかったのである。心から気の毒そうに、部落と浜辺の間を飛びまわって、藁を運び、薪木を運び、しまいには水死人によく効くという灸の道具まで運んで来た。

焚火は小半刻あまり勢いよく燃えつづけた。火気に照らされた死体を見つめると、生気が死体の毛穴から吹き移って行って、今にも死人が動き出しそうに思われた。だが、期待はむなしかった。あたたまったのは生きている人間の身体だけで、死人の方には何の反応も現れなかった。

平野国臣は重助に言いつけて、灸の用意をはじめさせた。効くか効かぬか知らぬが、最後の試みとして、灸に頼るほかは見込みはなさそうに思われた。

坂口吉兵衛もうあきらめた様子であった。吉之助の死体のそばで、手まめに薪木をつぎたしていたその手もいつの間にかしづりがちになり、力なげに砂の上に坐りこんでしまった。

国臣が立上って、ありつただけの枯木と枯葉を腕にかかえて投げ入れた。自棄やけな投げ入れ方だったの

で、火勢が衰え、おびただしい煙が吹き出した。煙の中で咳の音が聞えた。焰が燃え上って煙が晴れて気がつく、吉之助の大きな身体がかすかな瘧<sup>けいれん</sup>を起していた。

国臣と坂口が同時におうと叫ぶ。それに答えるかのように吉之助の口からどつと水が吹き出して来た。

\*

その日の昼すぎ。

藩庁の横目役と医者と二つの新しい棺桶を乗せた小舟が前の浜の波止場を出て、岸壁の外にもやっている上荷船に漕ぎつけた。横目役は医者ならびに足輕肝煎坂口吉兵衛立会いのもとに、船中の二つの死骸を検視し、これを二つの棺桶におさめて波止場に引きかえし、下町会所に運びこんだ。

手配は極めて素早く、また隠密に行われたのであるが、白昼新しい棺桶が二つも会所に運びこまれたのであるから、噂はたちまち町のここかしこに煙のようにひろがって行った。

(公儀お尋ね者の僧と山伏が日向境で斬られ、その死骸が町会所に着いたのだ)

(いや、斬られたのは、京都の坊主と勤皇組西郷吉之助で、山伏は無事で棺桶のそばに附添っていた)

(いや、ちがう。西郷吉之助は藩庁の命令で坊主と山伏を召取りに行ったのだが、二人が手向いするので、余儀なく船中で斬り捨てた。その際、西郷もあやまって水の中に落ちたが、生命には別条はないらしい)

(いや、三人とも死んでしまったのだ、棺はたしかに三つであった)



とりどりの噂の間に、町会所の門前には物見高い見物の人垣が立ちはじめた。

警護の足軽が棒を振りまわして追い散らしたが、なかなか立ち去る気配もなかった。中でも頑固なのは、下加治屋町上の園あたりの西郷、大久保組の一角らしい若侍たちであった。朱塗りの大刀を差し、肩をいからせた若侍が玄関に押しかけて来て、西郷吉之助は生きて居るのか死んで居るのか、それを確かめるまでは帰らぬと坐りこんだ。

だが、横目役谷村純孝は断乎として回答を拒否した。

「二人の入水者があったことは事実であるが、その姓名もまだ明らかでない。目下取調中である。いづれ藩庁から正式の発表のあるまでは何事も申し上げることはできぬ」

「おかくしになっても駄目だ。一人は僧月照殿、一人は西郷吉之助であることは既にわかっておる。藩庁はいかなる理由あって、この二人に入水を余儀なくさせたのか」

「二人の入水と藩庁とは何の関係もない」

「いや、藩庁の強制なくして、西郷吉之助ともあろうものが入水というようなせっぱつまった方法を選ばずはない。二人の投身は藩庁自らが手を下したも同然だ」

「お黙りなさい。いかなる根拠あって、そのような放言をされるのか。念のためにお名前をうけたまわっておこう」

「野津七左衛門鎮雄と申す。逃げかくれも致さぬ。握り拳ほどの文字で、そこもとの帳面に書きとめておいて下され。いつでもお目にかかるう。腰の朱鞘は伊達ではござらぬ」